

震災後 遺族の葛藤描く

東日本大震災の津波で石巻市立大川小に通っていた妹を亡くした佐藤そのみさん(26)が2019年に制作した映画が11日、大川地区で初めて上映された。住民ら約200人が自らの被災体験と重ねながら、家族を失った被災者の心の揺れを描いた作品を見守った。

大川小で妹犠牲・佐藤さん

大川小では、津波で児童74人、教職員10人が死亡・行方不明になり、佐藤さんは6年生の妹・みずほさん(当時12歳)を亡くした。幼い頃からの「故郷で映画を撮りたい」という夢をかなえるため、日大芸術学部映画学科に進学し、大川小で家族や友人を亡くした若者たちの心の葛藤を描いた2作品を制作した。

自主映画 地元で上映

で、もう1人はボランティアの大学生に恋心を抱き始める。2人は徐々にすれ違いますが、実はそれぞれが孤独や悲しみに向き合っていることを知る。

震災当時は「『かわいそな子』と切り取られ、自分が自分じゃないような気がしていた。楽しいことやうれしいことを引き受けてはいけないとも思っていた。それぞれがいろんな思いを抱えていたことを伝えなかった」と佐藤さん。作

中で2人が理解し合う姿を通し、「考えの違いや溝を乗り越え、また互いに話せる地域になれば」と希望を込めた。

ドキュメンタリー「あなたの瞳に話せたら」は、佐藤さんを含む3人の若者が失った家族や友人への手紙を朗読する形で物語が進む。「神様をすごく恨んで。なんで連れてったの」と抑えられない気持ちを吐露しつつも、今を生きる姿を描いている。

上映後のトークイベントで、佐藤さんは「大川の人に見てもらえたことが本当にうれしい」と語った。

大川小近くの釜谷地区出身の梶原清子さん(72)は、「多くの子どもが亡くなり、なかなか(大川地区に)足を運ぶことができなかった。力強く生きる大川の子



劇映画「春をかさねて」のワンシーン(佐藤さん提供)



制作した自主映画について語る佐藤さん(11日、石巻市で)

どもの姿に勇気をもらった」と目に涙を浮かべた。佐藤さんは現在、都内で会社員として働く。「(震災で)外からいろんな人が来て、心が落ち着かなかった人もいる。同じ思いを持っていただと地元の人に安心してほしかった。また(映画を)書いたり、作ったりしたい」と語った。